

## 学生の日常生活における

## RE-CREATION行動に関する研究

○阿部信博 吉本俊明 斉藤虎征 沢村 博 小川 貫 佐野公雄

(日本大学)

Re-creation 快 不快

### 1. はじめに

わが国におけるレクリエーションの概念については、戦後の混乱期から現在までの文化的、社会的変化のなかで、様々な議論が重ねられ、新しい時代に対応すべくレクリエーション論が展開されてきた。そうした議論の流れは、端的に言えば「よりよく働くため」から「よりよく生きるため」へと拡大してきたと思われる。

レクリエーションについては次のような見解もみられる。「レクリエーションはリクリエーション (re-creation) であり、直訳すれば再創造である。リクリエーションは日常的な単調なくり返しを時々破り、自分自身の肉体と精神を作り直すことに他ならない。いいかえれば、生活のエネルギーを、何かの形で、親しく、豊かに作り出すことなのである。<sup>1)</sup>」この概念から、リクリエーションとは何かを作り出す活動とみることができる。つまり、生活のエネルギーすなわち生産性(労働へのエネルギー)を高める必要が要求された時代的背景がうかがわれ、それがレクリエーションのあり方を規定するひとつの要因になっていたものと思われる。「あすへの働く力を作り出すための余暇活動」といった文字通りのリクリエーション的概念と言え、そうした社会的状況下にあったものと思われる。

広辞苑によれば、「レクリエーションは仕事や勉強などの疲れを休養や娯楽によって精神的、肉体的に回復すること。また、そのために行う休養や娯楽」とあり、これは前述のリクリエーション的解釈のような気持ちは感じられない。

戦後から現在までの経緯のなかで、レクリエーションは教育活動の一端を担うものであるべきとか、学習性のある活動であるといった価値的論議や、遊びは遊びでしかなく、見返りを要求すべきものではなからうかといった没価値的論議が、レジャー、レクリエーション峻別論と併せて論じられて今日に至っていると思われる。前述の広辞苑ではこうした論議にとらわれない見解を示しており、言わば、これが一般的なレクリエーション観とみていいのではなからうか。本研究は、現代の学生が日常の生活行動のなかで得られる快の感じ(それには勉強や食事といった行動も含まれる)が、レクリエーションとしての意義を包含するものではないかとの論議を試みるものである。しかし、前述したレクリエーション論に共通していることは、仕事や勉強以外の余暇活動が前提であり、レクリエーション活動に

仕事や勉強を入れることは困難と思われる。そこで、無謀かつ定義としての薄弱さは否めないが(後述)、前述のリクリエーション概念における「再創造」を重視し、日常の諸々の行動のなかで、生活のエネルギーを作り出す活動をあえてリクリエーション行動とし、快、不快によってそれを探ることを試みるものである。

広辞苑によれば、快はこころよいこと、こころにかなうこと、面白いこととあり<sup>9)</sup>、哲学辞典には、「快は環境の様相に対する受容(不快は拒絶)の態度であり、ゆえに快は、好み、望み、求め、獲得し、維持継続させようとする対象または状況に結びつく概念である」としている。さらに、E. フィンクは、「遊びの快」を「遊び」を形づくる様々な構造契機のひとつとして述べ、「快は単に感覚的なものでもなく、また単に知的なものでもない。それは独特な創造的形式の喜びであり、それ自身、多義的、多面的なものであって、深い悲しみや底無しの苦悩をも取り入れることができるし、恐ろしいものでもなお快く包含することができる」としている。そして、鷹取は、遊びについて、「それは「快」を追求し、享受することである」と述べている。<sup>10)</sup>

これらのことから、快は、一部には遊びにかかわるものと考えられるし、また、非常に広汎な行動によって得られる快から、障害をのりこえ、たとえ何がしかのリスクが存在したとしても究極は快が得られることも考えられる。人間はひとつにはこの快を獲得しようと追い求め、また遊びについても結果的には快が得られる一面があると思われる。面白いこと、こころにかなうこと、望み、求めである快は、当然人間にとっての生きがいや喜びに結びつく概念と思われ、そこにリクリエーションあるいはレクリエーションとしての機能が存在するのではないかと筆者は考えるものである。

### 2. 調査の方法

1986年7月N大学理工学部1年生男子260名(以下理系男子とする)、1987年1月法学部、経済学部1年生男子124名(文系男子)、1987年6月短大英文1年生女子97名(文系女子)、同理工学部3、4年生及び大学院生男子72名(理系上級)の合計553名を対象に表-1のような調査用紙による189項目についてのアンケート調査を行った。

調査項目の内容は、睡眠、食事、通学、談話、コンパ、授業、勉強、買い物、読書、家事、サークル活動、芸術作品や映画・音楽の鑑賞、テレビ・ラジオ、嗜好などに関するものである。

集計は、「非常に快を感じる」と「快を感じる」は「快」に、「非常に不快である」と「不快である」は「不快」としてまとめ、「どちらともいえない」と合わせて3つに分類した。これらの結果は、文系男子、文系女子、理系男子、理系上級の4グループに分けて集計しそれぞれの相違について比較考察を試みた。

表-1 調査用紙と回答の方法

① 快-不快の程度は右のスケールのようにになっています。  
 例えば、設問の状況が非常に快を感じるなら、スケールの5を○で囲んで下さい。

② わからない項目については回答しないで下さい。

	1	2	3	4	5
	非常に 不快 である	不快 である	ど ち ら も い え な い	快 を 感 じ る	非常 に 快 感 じ る
1. 夜の睡眠	1	2	3	4	5
2. 休日(日、祭日等)の屋敷	1	2	3	4	5
3. 授業中のうたた寝	1	2	3	4	5
4. 休み時間中のうたた寝	1	2	3	4	5
5. 電車、バスの中でうたた寝	1	2	3	4	5
6. 自由時間中のうたた寝	1	2	3	4	5
7. 一人で黙々と朝食をとる	1	2	3	4	5
8. テレビを見ながら朝食をとる	1	2	3	4	5
⋮					
⋮					
⋮					

### 3. 結果と考察

#### (1) 読書

趣味の図書、マンガ、新聞・雑誌、旅行に関する図書などには快を感じる者が非常に多く、推理小説、スポーツに関する図書、SF小説などにも多くの快を示している。文芸作品や自伝に関しては快を示す割合は減少しているものの不快と答えた者よりは多くなっている。専門書やテキストは読書の対象としては不向きであり、むしろ勉強の類と考へなければならぬと思われる。

グループ別にみると男子間では同様な傾向にあるが、女子に関してはスポーツに関する図書、SF小説、専門書・テキストで快の割合が男子に比較して低くなっている。総じて軽い気持ちで読めるものに快を感じる者が多いが、今調査の結果は、若者の書物離れが云々される昨今にしては読書好きの傾向とみていいのではなからうか。

#### (2) 芸術作品の鑑賞

まず、非常に映画好きと言える。ついで絵や彫刻の鑑賞

によって喜びを得られる者が多いとみられるが、民芸品や生活芸術品の鑑賞では多いとは言えず、日舞鑑賞は不適当と思われる。グループ間では男女間に差がみられ、女子グループは日本画、洋画、書道、生活芸術品等の鑑賞の快に男子グループより多く、生活芸術品、彫刻の鑑賞の不快で少ない傾向を示している。総じて、これらの鑑賞については女子の方が歓びの度合いが高いとみられ、さらに、日本画や日本映画よりも洋風のものにより高い快を示した。

#### (3) 音楽

演歌や日本民謡など日本のなものには不快を示す割合が高いものの、ポピュラーやロックを好む傾向は若者の風俗を物語るものと考えられる。

グループ別では、クラシックのなかでは女子が最も多

く快を示し、ロックのなかでは男子グループが多い。さらに、理系の1年生と上級生を比較した場合、ロックの快と演歌の不快に差がみられ、加合と共に音楽の好みが変わることも有り得ると推察できないだろうか。

#### (4) サークル活動

グループ別にみると、文系女子と理系上級のグループが他の2グループよりもサークル活動をより楽しんでいるとみられる。つまり、活動中にしても、発表・試合ににしても、またミーティングにしても両グループは他の2グループより快の割合が高くなっている。これはいろいろな意味で先輩、後輩の壁があり、女子にはその影響が少ないことが推察される。

各グループとも準備や後片付けを除いて、発表や試合よりも日頃の活動のなかに快を感じていることがうかがえる。しかし、自由意志での活動にもかかわらず、不快を覚えながら活動している者もある。

#### (5) 食事

朝食、昼食、夕食を通して共通していることは、「一人黙々と」、「専門書やテキストを見ながら」食事をとることには不快を、また、「友人と話しながら」、「家族と話しながら」、「自宅で」、「テレビを見ながら」、「ステレオを聞きながら」食事をとることには快を示す割合が非常に高くなっている。今回の調査の特徴のひとつにあげられるのは、友達とのかかわりに高い割合で快を示していることであり、前述した音楽好きは「ステレオを聞きながら」の食事にも現れている。さらに、後述することであるが、テレビが日常生活の中でRecreationの手段のひとつとして大きなウェイトを占めていることが「テレビを見ながら」の食事にもうかがえる。

過去、先行研究のなかで、「レジャーに期待するもの」

とか「余暇活動の目的」に関する様々なアンケート調査が行われているが、そのなかで「身体や心を休める」、「体力回復・増強」、「人間性を高める」、「人とのつきあい」などと並んで、「家族とのつながりを深める」、「家族団

らん」といった項目が常に上位にランクされている。今調査でも、一人で食事をとるよりも自宅で家族と話しながら食事をとることに高い割合で快を示している。ピクニックや郊外のレストランに家族で出掛けるといった行動はレクリエーションと言えるが、そうした機能は日常の3度の食事のなかにも存在するものと考えられる。

#### (6) 談話

先生との談話は総じて快を示す割合は高くなく、ことに女子グループにおいては男子グループに比較してやや低くなっている。しかし、理系上級グループでは項目によって快の割合が不快よりも高いこともあり、学年を経るに従い先生との交流が深まることや、将来を考慮した場合その談話に快を感じる割合が高くなる可能性があることが推察される。

友人との談話については、前述のように今調査では最も高い割合で快を示しているところであるが、「学問・研究」や「自分達の将来」についての談話による快は、他の内容についての談話より低い割合になっている。しかし、これらの項目の理系の上級生が1年生に比較して高くなる傾向がうかがえるのは興味深い。

家族との談話では、前述のように団らんを求めて家族内で飲食を共にしながら語り合う快を感じるものの、談話の内容については「遊び」や女子グループにおける「サークル活動」と「アルバイト」についての談話を除くと快の割合は高くない。しかしここでも理系上級グループの「将来について」の談話にやや高い快の傾向がみられるのはやはり興味深いことである。

#### (7) テレビ

高い割合で快を示している番組に、スポーツの実況、特集番組、バラエティ、ドラマなどがあげられ、歌謡、ニュース番組がこれに続いている。しかし、グループ別にみると、ここでも女子グループでは違う傾向がみられ、ニュース、スポーツ、特集、社会、政治・経済などの番組では男子グループに比較して快の割合は低く、逆に歌謡番組やドラマでは高くなっている。また、政治・経済番組のところでは文系1年生と理系1年生の快、不快が逆転しているのは興味深いところである。いずれにしても、多くの番組によって快が得られることから、日常手軽に楽しめ、面白いものとしてテレビの占めるウエイトは非常に大きいものと考えられる。

#### (8) 買い物

専門書やテキストの買い物か他の買い物に比較して快の割合が低いものの、殆どの買い物は楽しいもの、気持ちのよいものと思われる。特に女子グループの場合は、生活必需品の買い物で男子グループに比較して非常に高い割合で快を示している。男子の理系学生と文系学生の電気製品の買い物による快に違いがみられるのも興味深い。

#### (9) その他

次に、睡眠、通学、授業・勉強、家事、ラジオ、コンパ、嗜好等の結果について述べると、睡眠では、夜の睡眠に女子グループで4%、男子グループではそれぞれ7~8%の割合で不快を覚える者がみられるのは問題と思われる。休日の昼寝には高い割合で快を示し、授業や電車・バスの中でのうたた寝にも快と答えている者が多い。

通学については、徒歩や電車・バスで通学することには不快を示す割合が高く、70%程度の学生がこうした通学手段を用いていることから、かなり多くの学生が不快感を持ちながら通学しているものと推察される。しかし、友達と一緒に通学することや音楽を聞きながら通学することによって得られる快によってかなり相殺されるものと考えられる。語学用テープを聞いたり、テキストや新聞・雑誌、小説を読みながら通学することに関しては不快の傾向がみられる。

授業・勉強については、体育実技授業を除けば殆ど不快の割合が高く、特に一般教養科目の授業では男子グループで30%を超える割合になっており、こうした傾向は上級生にもみられる。しかし専門科目の授業では、各グループで20%前後の学生が快と答えており、不快と答えた学生とほぼ同じ割合になっている。前述したことであるが、テキストや専門書にかかわることは快の割合が低いことと併せ、総じて勉強は好きではないと思われる。

家事については、女子グループの場合、さすがに食事の準備や部屋の清掃などに快を感じる割合が高く、男子は全てに不快の割合が高かった。

ラジオを聞くことについては、前述したことではあるが、ポピュラー音楽を聞くことに高い割合で快を示し、歌謡番組、スポーツの実況(女子グループを除く)などにも快と答えている者が多い。英語や寄席を聞くことには不快を示す割合が高かった。

各種のコンパについては快と答える者が多く、仲間とのコンパがクラスやサークルのコンパよりも快感は大きいようである。

嗜好品についても、酒、コーヒー、紅茶、コーラ・ジュース、ケーキ・チョコレートなど全てに高い割合で快を示している。しかしタバコは男子グループではどちらとも言えず、女子では80%が不快と答えている。

#### 4. まとめ

N大学生 553名に対する調査結果から目立った点についてまとめてみると、日常の様々な行動での友達とのかかわりのなかで得られる快が顕著であった。そして、音楽や映画好きであり、男子はスポーツ好きである。

具体的な行動別にみると、

1) 読書に関しては軽い気持ちで読めるものに、より快

の割合が高く男女の好みにはやや違った傾向がある。

- 2) 芸術品の鑑賞によって得られる快は女子に多く、映画・音楽も含めて日本的なものより洋風なものを好んでいる。
- 3) サークル活動では諸々の煩わしさを除いた、活動そのものに快を求めていると考えられる。
- 4) 食事は友達や家族と一緒にすることで、より高い割合で快が得られ、そこにはテレビや音楽があり、自宅とすることがより望ましい。
- 5) 談話に関しては、友達のおしゃべりは最高であるが、厳肅性の高い話題を好む学生は多くない。しかし上級生では上昇傾向がみられる。家族との談話では快を得られるものの(女子はより高い)内容が制限される。先生との談話は快を示す割合は低い(女子はより低い)が、上級生は談話の内容によっては高くなっている。
- 6) テレビ番組は多岐にわたり、男女の違いはあるがそれぞれに楽しめるものが多く、日常生活のなかで大きなウエイトを占めるものと思われる。
- 7) 買い物は総じて好きであり、女子はこの傾向が強い。
- 8) 家事は、女子は快を得られる割合が高いが男子は低い。
- 9) 仲間が集まるコンパは多くの学生が快と答えている。
- 11) 授業や勉強で得られる快は体育実技を除いて不快とみられるが、専門の授業はどちらとも言えない。

以上日常生活のなかで得られる快すべてがリクリエーションあるいはレクリエーションとしての機能を存するとは思えないが、例えば、家事労働の経験が個人の成長を助け、明日へのエネルギーとして、さらには将来をより良く生きるための糧としての機能が存しているものと筆者は考えるものである。

労働(仕事)と遊戯(遊び)の関係については、多くの著名な哲学者、心理学者、経済・社会学者などによって論じられてきた。そして、それが現代のレクリエーション概念の基盤ともなっていると思われる。

現代社会では、諸事情によって労働時間が短縮されて余暇時間が延長し、しかも労働の本質的意味(人間としてふさわしい仕事)が失われつつあり、他の諸事情とあいまって人間疎外の状況を呈してきていることは多くの人々が認めるところである。つまり、ストレスや人間疎外を解消し、人間の本質的な活動を、延長された余暇時間に求めざるを得ない状況下になってきたと思われる。しかし、筆者が疑念を覚えるのは、確かに多くの人々がそうした状況下におかれていることが事実であっても、全ての人ではなく、時

代に即応した人間らしい仕事として認識し従事している人々もまた非常に多いものと考えられる。

J. アンリオは、「人が仕事をする場合—それが本当に「仕事」なら—それは、今していることをすることをその人が承諾したからである。人は、自分で望むことしか決して《しない》のである。・・・たとえ「強制された」ものであっても、それには、行為者の承諾と、その任務に対処するある程度知的な編成と、絶対にいいとは言えないにしても少なくとも現状としては好ましいと判断された目標を実現するための手段の発動とが、含意されている」さらにアンリオは子供の勉強と遊びについて述べ、勉強は少なくとも遊びと同じくらい子供を誘い、興味をそそるものであり、「行い、作る快楽」の強さを指摘している。

ある人が、都会を離れて高原に住み、自給的生活を送ろうとする場合、彼にとっては日々仕事の連続であろう。この場合、十分な余暇時間は存するのであろうか。しかし彼は、日々新たな活力を得て充実した人生を送ることも可能であろう。

もし人間らしい仕事が減少し、人間らしい活動を余暇に求めるなら、人間生活の中で「仕事」と「余暇」の立場が逆転してしまうと言ったら言い過ぎであろうか。カイヨワが述べている、いわゆる、俗と遊の関係が融合されてはならないのだろうか。仕事と遊び、二面のひとつとでも言える人間、この両面が再創造(単に労働力としてではなく)の機能を持ち、両面から明日へのエネルギーが生まれ、心にかなうこと、喜べること、楽しめることが得られるのであれば、Recreationの機能を存しているのではなかろうかと考えるものである。

#### 引用・参考文献

- 1) 江橋慎四郎他：「現代レクリエーション講座 1-レクリエーション概論」，ベースボールマガジン社，1974.
- 2) E. フィンク 石原達二訳：「遊戯の存在論」，せりか書房，1971.
- 3) J. ホイジンガ 高橋英夫訳：「ホモ・ルーデンス」，中央公論社，1963.
- 4) J. アンリオ 佐藤信夫訳：「遊び」，白水社，1986.
- 5) 前川峯雄他：「レクリエーション事典」，不昧堂出版，1971.
- 6) 日本レクリエーション学会：「レクリエーション学の方法」，ぎょうせい，1987.
- 7) 丹羽弘昭他：「遊戯と運動文化」，道和本書院，1979.
- 8) 下中直也：「哲学事典」，平凡社，1971.
- 9) 新村 出：「広辞苑第2版補訂版」，岩波書店，1976.
- 10) 梅村清弘：「人間とレクリエーション」，大修館書店，1978.